

受難の主日

マルコ 11・1 - 10

マルコ 15・1 - 39

2018.3.24

高円寺教会 18:30 ミサ

クラレチアン宣教会 梅崎 うめざき たかいち 隆一神父

再審請求があつて、再び裁判をやってみたら無罪になるという報道がしばしばあります。警察や司法というのは法律というルールを守るためにとても大切で、それによって社会秩序が保たれます。しかし、人が作ったシステムの不備や人が運用することの限界を見せつけられます。警察の発表や司法の判断、法律を作る政治家の意見について時々疑ってみることも必要であると痛感します。

イエスも冤罪で捕まり、死刑囚となって殺されました。神は人を超えているのだから、神の子であるイエスは自分の潔白を証明し、それから自分をおとし入れた人々に大きな罰を与えることもできたはずですが、でもイエスは仕返ししたり恨んだりもなさいませんでした。

彼は自分自身の名誉挽回のために力を傾注することもなさらず、全ての人の救いだけを望まれました。その全ての人の中にはイエスを十字架にかけた人、冤罪であったのに殺された全ての人の中にも含まれます。神は全ての人（生者と死者）をお見捨てにならず必ず救われることを示してくださいました。それから、上記のような規模の大きなものではなくても、日常でおとしめられた全ての人々が救われていることを示されました。

人の力ではどうしようもない不幸が身にかかって殺された人が、神から呪われていないことを神ご自身が人となり、苦しみを生きることで人を超える神の救いを証してくださいました。たった一人の人がたとえ全世界の人から憎まれても、あなたはかけがえのない人であるという神のみ心を証してくださいました。

死刑の冤罪だけではなく、戦争で犠牲になった人々、あるいはいじめによって自死におこまれた人、どんな不幸が降りかかっても人は神から愛されていることを神ご自身が「友のために命を捨てる」あり方で示してくださいました。

自分の命を愛する人は、神ではなく多くの人に愛されることを望み、やがて神から与えられた命を失ってしまいます。しかし神を愛する人は、人を愛するが故に正しいことを語り、多くの人に憎まれますが、神のわざを証する者となります。神に愛されたわたしたちも、神と同じ愛を示すことでイエスと同じように苦しむこともあります。それでも恐れなく神のわざを証して生きることができよう、共に祈りましょう。